「友人」と「教師」に関する自伝的記憶の感情価に関する研究

想起テーマの特定性を要因に加えて

○兵藤 宗吉¹・李 岩²・佐藤 研一郎³(中央大学¹・中央大学文学研究科²・中央大学文学研究科³)

キーワード：自伝的記憶、感情価、友人と教師

A study of the relationship between autobiographical memory and valence.

Muneyoshi Hyodo¹, Yan Li² and Kenichiro Sato³(Chuo University¹, Graduate School of Letters, Chuo Univ², Graduate School of Letters, Chuo Univ³)

Key Words: autobiographical memory, valence, friend and teacher

問題目的

これまでの一連の研究から、小、中、高校時代などの、「時代」をもとに自伝的記憶を想起させる場合（兵藤・野内, 2004, 2005, 2006）、および、「親」や「進路」といった「想起テーマ」をもとに想起させる場合（兵藤・佐藤, 2014）において、想起された出来事感情価ごとの割合は快・不快・中立の順にほぼ5:3:2になる、あるいは快な出来事が不快な出来事より多く想起されるという結果が得られている。これらの結果は、斎藤（1993, 1994）と類似する一方、自伝的記憶の想起の安定性を検討した神谷（1993, 1994）のように不快な出来事の方が快な出来事よりも多く想起されたという結果も報告されている。

本研究では、時期の特定性の観点から自伝的記憶の構造が階層構造になっていると仮定するConway(2005)のモデルをもとに、想起テーマに「高校の」とつけることによって特定性を操作したうえで、想起された自伝的記憶と感情の関係、およびそれらの自伝的記憶の特徴について検討を行う。なお、本研究で使用するデータは、想起テーマの特定性と感情制御効果の関係を検討した兵藤（2019）と同一データを使用した。

方法

参加者：大学生59名（男性26名、女性33名、 $M=21.22$, $SD=1.53$ ）が実験に参加した。

実験冊子：フェイスシート、自伝的記憶想起前の気分評定用紙、出来事を記入する用紙2枚、自伝的記憶想起後の気分評定用紙、自伝的記憶の評定方法記載用紙の計6枚を実験冊子とした。実験冊子は特定性の2条件とテーマの順番によって4パターン作成された。想起テーマは「友人」と「教師」であった。特定性は「高校の」+想起テーマが記述された条件（特定性高条件）と想起テーマのみが記述された条件（特定性低条件）を被験者間要因として設定し、各条件に参加者を無作為に割り振られた。気分評定用紙は寺崎・岸本・古賀（1992）の多面的感情状態尺度のポジティブ、ネガティブそれぞれの下位因子3項目ずつ、合計18項目で構成されていた。

手続き：実験は大学の講義の一環として集団法で実施された。実験冊子配布後、実験者の指示で実験が行われた。フェイスシート記入後、実験参加者は自伝的記憶想起前の気分状態測定、自伝的記憶想起課題×2回、想起後の気分状態測定、想起した個々の自伝的記憶への評価の順番で課題を行った。

自伝的記憶想起課題は冊子に記載された想起テーマの順番で各テーマ5分ずつ行った。個々の自伝的記憶への評価は、想起された出来事に対してそれぞれ、感情価、重要度、鮮明度を5段階で評定させた。実験時間は20分程度であった。

結果

表1は各条件における想起数、感情価、重要度、鮮明度評定の平均値および標準偏差を示したものである。

表1で示す変数について、特定性（高、低）×想起テーマ（友人、教師）の2要因混合分散分析を行った。その結果、想起数で

は想起テーマの主効果が認められ、「友人」の方が「教師」よりも想起数が多かった（ $F(1,52)=15.60$, $p<.001$ ）。まだ、感情価（ $F(1,52)=40.41$, $p<.001$ ）、重要度（ $F(1,52)=20.56$, $p<.001$ ）及び鮮明度（ $F(1,52)=5.66$, $p<.05$ ）も想起テーマの主効果も認められ、「友人」の方が「教師」よりも感情価が高く、より重要かつ鮮明することであった。次に、感情価評定の値ごとに、評定値1,2を「不快」、評定値3を「中立」、評定値4,5を「快」として分類を行い各条件の感情価ごとの想起率を算出した。表2は各条件の感情価ごとの想起率を示す。特定性（高、低）×想起テーマ（進路、部活）×感情価（快、不快、中立）の3要因混合分散分析を行った結果、感情価の主効果が認められ（ $F(2,52)=33.62$, $p<.001$ ）、多重比較の結果、「快」な出来事が「不快」及び「中立」な出来事より想起率が高いことが示された。

考察

表1と統計的分析により、想起テーマに関しては、「友人」のほうが「教師」より想起数が多く、また感情価、重要度、鮮明度でも高いので大学生にとって「友人」は「教師」よりも大きな存在であることが理解できる。この結果は、青年期の一般的特徴として納得のいくものであろう。表2と統計的分析により、感情価における快:不快:中立の割合に関しては、おおむね、これまでの結果と一致するものであるが、快>不快>中立ではなく、快>不快=中立が認められた。

表1 各条件における想起数、感情価、重要度、鮮明度についてCONWAYの平均及び標準偏差					
	友人	教師	高校の友人	高校の教師	
想起数	平均 8.07 標準偏差 (3.13)	7.69 (2.88)	8.04 (2.95)	8.72 (2.70)	
感情価	平均 3.70 標準偏差 (0.63)	3.08 (0.72)	3.80 (0.60)	3.14 (0.63)	
重要度	平均 2.51 標準偏差 (0.76)	2.66 (0.84)	2.37 (0.88)	2.80 (0.78)	
鮮明度	平均 3.65 標準偏差 (0.78)	3.72 (0.87)	4.08 (0.63)	3.84 (0.88)	

表2 各条件における出来事の内容と感情価ごとの割合

	特定性高条件			特定性低条件		
	快	不快	中立	快	不快	中立
友人	0.63	0.17	0.19	0.65	0.12	0.23
教師	0.41	0.21	0.28	0.40	0.22	0.27